

食育のあり方考えるフォーラム

J A大阪中央会、大阪府栄養士会、大阪スローフード協会の3団体が、それぞれの立場で進めている食育活動を発展させる場として「大阪食育連絡会議」を設立した。これを記念して、都市における食育のあり方を考えるフォーラムを大阪市内で開き、実践例などを紹介し、重要性をアピールした。(山口昌平)

フォーラムには約300人が参加。まず、武庫川女子大教授の梶形公也さんが「食育は心の

教師支える態勢を 農の役割理解して

プレゼント」と題して基調講演。子どものころや学生、新婚時代によく山菜を取って食べた体験から「おいのしない食材は「買」う気が起こらない」と話した。大阪教育大で教べんととって来た時、野菜づくりによる教育を導入。「小学校教諭になる学生には知識を具体的な生活と結びつけることが大切」として、「作って食べることで野菜を実感させる狙いがあった」と説明した。

さらに、様々な職業の人たちで子どもの世話をするネットワークを作り、教師を支援しようという活動を提案。「食育は大きな可能性を与える」と期待を込めた。

この後、パネルディスカッションがあり、梶形さんのほかに4人が加わった。

J A大阪中央会専務理事の菊井健次さんは「だがどういう気持ちで農産物を作っているかという、農の役割を理解してほしい」と強調し、「農作業を通じて食の大切さを教えてほしい。親子の料理教室の日があってもいいのでは」と話した。

3年前から食育に取り組んでいる大阪府泉佐野市立はるか幼稚園では、園児がジャガイモやミニトマトなどを栽培する。園長の中村陽子さんは「自分で育てると、苦手な食べ物も口にすることがなる。園で習ったことを家庭で思い出してくれたら」という。

また、辻学園調理・製菓専門学校技術教育本部顧問の為後喜光さんは「いつでもどこでも好きな物が食べられるため、忘れられていることがある」といい、「おなかいっぱい」と言っ

てご飯を残した孫を注意した時のエピソードを披露。料理を作る立場から「食べる相手のため」という気持ち

が大事」と語った。

さらに大阪府立健康科学センター健康度測定部長で医学博士の佐藤眞一さんは、多くの栄養士がボランティアで地域活動に励んでいることをアピール。子どもの野菜摂取率が改善されていることなどから、「子どもへのアプローチが出来てきた」と話した。



都市部での食育について考えるフォーラム。経験を変えた様々な意見が出された(大阪市内のホテルで)

大阪食育連絡会議は、大阪スローフード協会内に事務局(06・63665・8631)を設置し、活動している。